散文詩

愛するあなたへ

牧草　泉

一．

今日も日が暮れたわ
私って何をして一日を送ったのかしら、と思っているところなの
ぼんやりとあれこれ思い巡らしながら過ごしたのよ
でも何を考えて、こんなに長い時間を過ごしたのかよく分からないの
ただ、時間だけが無情に流れて行った？
そうとしか思えないわ
ふと気がついたら夕闇が迫って・・・時間が有無を言わせずに私を運んで
いく、そんな感じなの
夜になると意識が回復して、記憶が頭の中に残っているって感じだわ
夕方になって、ふと洗濯をしようと思ったの
これって、意識朦朧の状態から立ち戻りつつある証拠なの

自分ではっきりそう思えるのよ
私って、いつの間にか昼と夜が逆転してしまったのよ
あなたも時々私の不規則な生活を注意してくれたんだけど、昼夜の逆転を正常にはできないままなの
だからといって病気じゃないのよ
一度精神科医に診てもらったの、そしたら、「夜昼逆転した状態で特に苦痛や負担を感じなければそれでいいんだ」って言ってたから
カゴに入れていた洗濯物を洗濯機の中に放り込んでいるとき、あなたの下着が一枚混じっているのを発見したのよ
その塗炭、あなたの汗臭さが周囲に立ち込めて切なかったわ、あなたの腋臭はかなり強く臭ったでしょ
外は新月で真っ暗闇よ、車の音が激しく耳に突入してくる夜
満月のときはこんなに騒がしいとは思わないのに、人通りが絶えた車の音だけの夜
その闇を通り過ぎていく車も、昼間よりずっと速度を出しているのが分かるわ
洗濯機はあなたが選んでくれた自動洗濯機、でも今となっては経済的に負担になってるわ
第一大きすぎるのよ、それと省エネタイプじゃないからなの、分かるでしょ？
私が小型を買いたいと言ったとき、あなたって、「少なくとも中型以上が必要だ」って言ったでしょ
理由は「二人とも綺麗好きだから」って

一人身になって見ると中型ってすごく大きく感じるわ、でも、洗濯は無理なくできることは確かだわ、洗濯機の音は軽やかだし・・・・・私の古い洗濯機って悲鳴を上げてたでしょ？　あなた何度か言ったじゃない？　「ほら見ろ、中型でよかったんだよ」って

あなたの下着も一緒に洗ってベランダに干したの、窓を開けてみたら夜風に吹かれてたなびいていたわ

もう乾きました収納してくださいって、言っているようだったわ

冷蔵庫の中の始末もしなければならないの、食べ残しが一杯になって冷蔵庫が悲鳴をあげているのよ

昨日のご飯の食べ残し、賞味期限が切れた納豆といわしの干物

あなたって経済的なことにはほとんど疎かったのに・・・そのくせ節約家だったわね

買いだめ好きで、おまけに買い込んだ食べ物の日持ちにはうるさくてね

私が賞味期限の切れた納豆を捨てようとしたら、さっと取り上げて

納豆って賞味期限が切れて十日までは大丈夫だって

豆腐も冷蔵庫に入れておけば期限後四日は大丈夫だって

私は思ったわ、理系出身が嫌われるのってこんなところにあるんだなって

以前一緒に暮らしていた彼はそんなにうるさくなかったわ

別れたんだから、大きなことは言えないんだけど

でも、家庭内のことでは、特に台所に関しては何も彼って文句は言わなかったわ

その点あなたはいろいろと注文つけたわね
「俺って貧乏家庭の出なんだ、一生この貧乏癖は直らないんだ」って、そうして、おばあちゃんの人生観を私に諭すように言ったわ
「稼げる者は無駄遣いしてもいいが、才覚のない者は節約する以外にないんだ」ってね
そう、あなたって自ら甲斐性なしだっていうことを自覚していたのね
私だって、それほど生き方が上手なわけじゃなかったけど
私は祖母からそんな教育を受けていなかったから、ときどきあなたと衝突したのよね
でも、私は自分が派手な性格だとは決して思わなかったわ
ごく普通の女だと思っていたのよ、少し見栄っ張りで、人の目が少し気になり、意外とがめつさもあり、少し他人に親切をほどこして満足する
異性に対しても人並みに優しさがあり、他人に対する小さな親切はいとわない
だからありふれた女だと思っていたの
でも友人の見る目は少し違っていたわ
「物書きなんて河原乞食だよ」って、何度も忠告してくれた友人も何人かいたわ
それが、私の書いた作品の評はほとんどすることなく、なのよ
「地道に生きるんだよ、物書きなんてばくち打ちと同じなんよ、あなたに才能はあると思うけど、世に出るとは思わないよ」
「物書きは掃いて捨てるほどいるのよ、あんたが世に出るって確率は宝くじの一等賞に当る確率と同じなの」

「やめといたほうがいいわよ、それに、あなたって経済観念が欠けてるから」
ある友人はこんな忠告をしたわ
「あなたって英語が得意じゃない？　翻訳家になったら？　そっちのほうが手っ取り早いと思うわ」
でも、そんな忠告をしてくれた当の本人はひそかに詩を書いていたのよ、子育てをしながらワードを打っていたのよ
矛盾してると思わない？
どうして彼女が詩を書いているのを知ったのかって？
何気なく、退屈しのぎにパソコンに彼女の名前を打ち込んでみたの　なぜ彼女の名前を打ち込んだのか、今もってわからないのよ
すると、いくつか彼女の名前がモニターに出てきたの
『南十字星』っていう詩誌の新人賞に彼女の名前が出てきたのよ
はじめは、同姓同名の別人だと思ったわ
そうでしょ？
私に物書きを止めるように、忠告してたんだからね
ところが、住所を見たら同じなのよ、もちろん番地までは書かれていなかったわよ、でも同じ市で町名が同じだったの
同じ町内で同姓同名って確率はどのくらいなのか知らないけど、とっても小さいと思うのよ
彼女の作品って佳作だったわ、抒情的で味のある詩だったわよ
彼女って、自分のことは棚に上げて私を責めていたのよ
私笑ったわ、あいつなんて奴なんだってね

そうなの、心の中では彼女を許容している部分があったわ、あなたにだって分かるでしょ？
友人は趣味の範囲での作詩だったんだと思うけど
でも、自分も文学に手を染めていながら、他人に忠告するなんて矛盾しているって思わない？
彼女って生真面目くさった顔をして私に忠告したのよ、その表情が今でも浮かんでくるわ
私は、彼女が詩にのめりこんでいるなんて、これっぽちも思わなかったわ、だから、思わず笑ってしまったの
彼女ってそんな感じはまったく見られなかったもの　高校時代だってバレー部でがんばってたんだし・・・
そうね、図書館で会ったこともほとんどなかったし、第一彼女が小説の類を手にしていること見たことなかったわ
そうして、笑いながら涙が出てきたわ、何の涙かしらないけど
でも、後になって考えてみると、物書きって、そんなのがいっぱいいるのよね
私だってそうだし、あなただってそうなのよ
彼女も例外じゃなかったのよ
でも、私に忠告しようと思った動機は何なのかしらね？　今でも分からない
よく考えてみると、物書きってまったく論理的じゃないのよ
彼女だってそうなのよ、私に真剣な忠告したからって、自分の生きざまに矛盾はこれっぽっちも感じていないのよ

そうして自分が一番正しいって思ってるんだから
その一番の典型が太宰治だと思うの
人にけんかを吹きかけて、撃ちてし止まぬ、だったでしょ、感情的で、愛憎の起伏が大きく、妬みやすく猜疑心が強い
でも私って、太宰治をとても尊敬してるのよ
私ってあんな生き方はできないもの、仮に私が男性であってもね、とても無理だわ
結論から言うと、みんなそれぞれ勝手に生きてるのよ、物書きは特にそうだと思うわ

二．
あなたとの二年の同居生活が今になって懐かしくなってるの
どうしてあなたのためにもっと尽くしてやれなかったのかなって
今になって後悔してるのよ
おかしいと思わない？
でもね、あの時は感情の勢いで、けんかになったのは仕方がなかったのよ
私だって言いたいことは山とあったのよ
分かるでしょ？
私って興奮すると後先が見えなくなるの
女って、私に限らずみんなそうだと思うわ、これって女には普遍的なものなのよ
あなたが誰と一緒に生活しようが、相手が女である限り必ず遭遇するものなのよ

そうは言っても抑制できる場合もあるんだから、私も感情を抑えればよかったのよ
自分でも分かってたんだけど、この短気な性格って亡霊のように私にまとわりついてはなれないのよ、持って生まれた性格なのよね
でも、あの時私が我慢して耐えたとしても、その行為が果たして意味があったのかどうかは分からない
いずれは、私たちは別れる運命にあったのよ、これって今は確信に変わっているの
私が一番あなたを許せなかったのは、あなたが私を常にある人と比較してみていたことなの
あなたは具体的には言わなかったけど、私には分かっていたわ
そして、それは一人ではなかった、そうでしょ？
はじめは分からなかったけど、時間がたつとおぼろげながら輪郭が浮かんできたわ
あなたって、いつも私のしていることを見て、ふと立ち止まることがあったわね
ちょっと首をかしげて、少し苦笑いをするか戸惑った表情を見せたわ
あれって見られるほうからすると、気持ち悪いのよ、いっそ文句を言ってくれたほうがすっきりするの
あなたに言おうかと思ったこともあったんだけど、あなたの心象を悪くするといけないって思いがして我慢してたのよ
あなたは、「お前は他人への思いやりが足りない」ってよく言ってたけど、私もそれなりにあなたに気を配っていたのよ

洗濯物は干したんだけど、独り身の癖に男の下着が私の下着と一緒に物干しにぶら下がっている
変な光景だわ
いっそ捨ててしまおうかと思ったわ、でもどうしても捨て切れなかったわ
あなたの着古した下着を捨てきれない私
私もどこか狂っているんだ
そう自分で思ったわ
あなたの下着が乾いたら私、どうするのかしらね
自分でも分からない
捨てる？
それはできないわ、過去が消えていくから
あなたがよく言っていたわね、過去って一生背負っていくもんだって
それって分かる気がするわ、そうよ、私はあなたという過去を背負っているのよ
でも、あなただって私という過去を背負っているのよね
お互いにあいこなのよね
過去を振り返るといろいろなことが思い浮かんでくるわ
以前にも増して、そんなに思うようになったわ、年のせいもあるかもね

三．

ひとり身になって、時々あなたとの出会いを思い出しているの、自分でもなぜだかわからない

あなたはあの時、こんな出会いはありふれてるんだって言ったわね
冬の寒い夜、バス停に立っていた私にあなたが声をかけてきたのよ
雨が降り始めていたときだったわ
パチンコ会館の明かりも消えていたから夜の十二時近かったわね
私ってパチンコ好きなのよ、パチンコすると胸の中がスッとするの、だから時々行ってたのよ
毎日行く財力なんてないじゃない？　パートで働いて稼いだ生活費を削ってパチンコに使うんだから
でもね、あのパチンコ店の背の高いイケメンの店員って、時々出る台を教えてくれるのよ
私ね、コイツ私に気があるんだなって思ってたの
でも、後で分かったわ、彼らはそれぞれ出る台をいくつか持っていて、めぼしい客にサービスで教えてたのよ
後で常連から教えてもらったわ、私ってめぼしい客ではあったのよ
でも、彼っていい子だったわよ、いくつぐらいだったのかな？　まだ二十代であったことは確かよ
あの時は、あなたもパチンコ屋から出てきたんだと思ったわ、でも、そうじゃなかったのね
あなたは散歩してたって言ったから
私が「こんな真夜中に？」って聞いたら、あなたはぶっきらぼうに言ったわ
「夜は人の視線がないからだ」って
それって分かる気がしたわ、私もパチンコ屋に行くと、人の視線がまった

くなくなることを知っていたの
人間はいっぱいいるのに、私のほうを見ている視線はまったくないんだから、これって競輪、競馬もおんなじだわよ
私の友人にも、気がいらいらするときは競馬場に行くって言うのがいたの
「群衆の中の孤独を味わいに行く」って言ってたから
私だって、人の視線を避けるためにパチンコ屋に行っていたのかな？　と思ったことがあったもの、たしかにそうよ
パチンコって、はじいてる時って、あの騒音も気にならないのよ
店に入ったときは、すごくあのジャラジャラっていう音、やかましいと思うんだけどね
でもね、打ち始めると気にならないのね、騒音が聞こえなくなるもの
パチンコに来る人って、多分あの騒音の中の静寂を楽しんでるのよ
ポップスにもあるじゃない？　「サウンド　オフ　サイレンス」って、知らないの？　これって逆だけど、同じことなのよ、「サイレンス　オフ　サウンド」なのよ
従業員は喧しいだろうって？　何度か聞いたことあるわ、やはり喧しいって言ってたわ
あんな騒音の中で、一日中過ごし続けると聴覚障害になるって、医者から言われたって言ってたわ
人間って社会的動物っていうけど、一人になりたい時だってあるじゃない？
私って週に二回はパチンコに行っていたから、意外と孤独が好きな女かな

ってときどき思ったこともあったわ
でも、人里離れて仙人生活をするってことは思ったこともなかったから、
どっちつかずの人間なのよ、私って女はね
その夜は、あなたが傘を貸してくれたのでぬれずに済んだわ
あなたは言ったわね、「俺は近所だから大丈夫だ」って
私が傘を返す機会がないですよって言ったら
「いいですよ　どうせ安物の傘なんだから」って
それを聞いてあたしも借りる気になったのよ
見知らぬ人から突然傘を差し出されて、簡単に、そうですかありがとうございますってこと、普通には言えないでしょう？
第一気持ち悪いわよ
でも、あなたからそう言われて私は借りることに決めたの
そのとき、あなたに対する警戒感が消えたのよ、それに雨も強くなってきていたし・・・
これって、私の打算的仕儀だったのね、小走りで雨を避けてアパートに向かうんだって思ったら、自分の雨にぬれる姿が惨めに思われて、借りようって気になったのよ
私のアパートって、バスから降りて十五分ほど歩かなければならないの
辺鄙なところにあったのよ
そう、それを思い出して借りることにしたのよ
それっきり、もうあなたとは会わないだろうと思ったわ
傘を借りる以外に、あなたにはそれほど強い印象はなかったもの
でも、あなたのはにかんだような表情の中に見えたやさしさは心に残った

わ
ささいなことだったけど、これはいつまでも印象に残ったわ、今思い出しても素敵な一瞬だったわ

四．

これっきりだろうと思っていたのに、またあなたに会ったのよね、しかも、思いもしないところでね
新聞社の主催で開かれた講演会で、私の席が偶然にあなたの斜め前隣だったのよね
あなたってすぐにわかったわ　小柄で強度の眼鏡をかけて、額が少し退却していて
直木賞作家のHの公演だから面白いかなって期待していったんだけど、期待はずれだったわ
あなたも同じ意見だったわね、説教じみていてね、上から見る目線で話すからうんざりしたわ
「私ってあなたの説教聞きに来たんじゃないのよ」と言ってやりたかったわ
直木賞をとったという矜持が、あんな態度をとらせるのかしら
最初、あなたに声をかけようとは思わなかったわ、あなたって単なる行きずりの人だったんだから
内心、傘のお礼は言ったほうがいいかなと思ったのよ、でも、それ以上のかかわりは避けたかったのところが、あなたが先に声をかけてきたんじゃない？

わたしだって、席がすぐ近くでは知らない振りできないでしょ？　だから傘のお礼を言ったのよ
そのときって、私は職場をくびになって落ち込んでいたのよ
正社員だったんだけど、常務が使い込みをして、それが公になって新聞にまで載って、それで倒産したのよと
やむを得ず解散というより、社長が廃業してしまったのよ、もちろん全員失業よ
私って失業して、ちょうどハローワークに行っていたときだったの
派遣社員だから、いつかは首になるってことは以前から覚悟してたんだけど
現実に解雇されるとかなりショックだったわ、生活がかかっているからよ
それに、私ってそれなりに信用されていたからなおさらなの
社長が私に特に目を掛けてくれて　一応正社員待遇だったのよ
派遣社員で入社して、社長が私を特に気に入って正社員待遇にしてくれたの、こんなことまれらしいの、
どこが気に入ったのか、私のどこを見てこれは使えると思ったのか、今でも分からないの、何の資格も持たなかったし・・・
多分、お客との対応が気に入られたと思うの、でも、それって本当？　と聞かれると自信はないわ
人間って印象の良し悪しがあるのよね　それに相性もね
私は単に社長に悪い印象を与えなかったというだけだったのかもね
まあ、この女なら悪いことはできないだろうっていう程度だったのかもね
いろいろな保険にも加入できたし、身分保障があって私も安心したものだ

ったわ、給料もそれ相応に出たし・・・
それが急に解雇
わたしは社長に尋ねたの、どうして会社を解散するんですかってね
社長は言ったわ　部長の使い込みが大きすぎる
これでは再建は無理だ、今解散することが会社のためにいいんだ、社員のためにもいいんだって
銀行の債務はどれほどなんですか？　って聞いたらね、八千万位だって
それ、どうするんですか？　返せないよ、でも債務は会社が負っているんだって言ったわ、
なにか、銀行にも責任があるんだっていう言い方だったわ、そんなことあるのかしらね
私には会社内部のことはわからない、だからそうですかと言う以外なかったわ
もちろん役職にあるわけではないんだから、それ以上社長に尋ねることもはばかられたの
社長は私に言ったわ、君も別な会社で頑張ってくれ、健闘を祈っているよ
そのとき、社長の目は潤んでいたわ　その目を見て私はすごく満ち足りた気持ちだった
でも現実は厳しいのよ、結局はハローワーク通いよ
ハローワークって、私は行きたくないのよ、来てる者みんな、目がうつろでしょ？
自分で選んだ道だって、何度も言い聞かせながらハローワークに通ったわ
でも三十半ばの女にはたいした仕事はないの、私が高望みをしたのかもし

れないけど
担当者は言ったわ、今は会社が外国に逃げ出している状態だから贅沢はいえないでしょうって
それくらいは私だって知ってたけど、目の前に突きつけられるとね、やはり辛かったわ

（未完）